

第4回

マルクスと エンゲルスの 古典案内

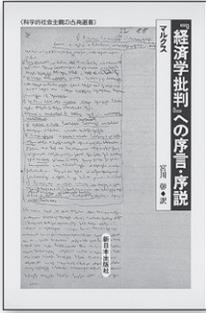
石川康宏

神戸女学院大学名誉教授 いしかわ・やすひろ

マルクス

『経済学批判』への序言

(1859年)



新日本出版社 定価1540円(税込)

1 史的唯物論についての唯一の系統的な解説

1840年代から経済学の研究をつづけたマルクスは「1857-58年草稿」で、ようやくまとまった著作の原稿を書き始めます。これをもとに初の本格的な経済学の著作として出版されたのが『経済学批判』第1分冊でした(1859年)。ただし内容は「商品」と「貨幣」にとどまり、「資本」の叙述には研究不足だと考えたマルクスは「1861-63年草稿」に進み、結局これの第2分冊は出さず、1867年に『資本論』第1部を出版します。

今回取り上げるのは、この尻切れとんぼに終わった『経済学批判』の「序言」です*。まだ「資本」の執筆には踏み切れない研究水準にあり、分量もわずかなこの文章を重視するのは、そこに含まれた「一般的結論」の「定式化」(14頁)が、マルクスによる史的唯物論のほぼ唯一の系統的な解説——エンゲルスには『反デュリング論』や『フオイエルバッハ論』などがある——となっているからです。それは今日、広く「史的唯物論の定式」と呼ばれています。

*引用とページ数はマルクス『経済学批判』への序言・序説(宮川彰訳、新日本出版社「科学的社会主義の古典選書」による。ただし訳文は一部変更してある。

2

「ブルジョア経済」「経済学批判プラン」

「序言」の書き出しは「私はブルジョア経済の体制をつぎの順序で考察する」です(11頁)。「ブルジョア経済」は今でいう「資本主義経済」のことですが、この時期のマルクスはまだ「資本主義」という用語にたどりついていませんでした。考察の「順序」をマルクスは、資本、土地所有、賃労働、国家、外国貿易、世界市場の6項目としましたが、その構想は研究の進展の中で変更され、『資本論』第1部出版の時点では6項目の全体が——草稿で展開された論点のすべてを含むわけではありませんが——『資本論』全3部の視野に含まれるものとなっていきます。

このように他のどの文献とも同じく「序言」もまたマルクスの研究史の一面面をなしています。執筆当時は出版されなかった『ドイツ・イデオロギー』(1845～46年執筆)に初めてまとめて書き込まれ、後の『資本論』にも部分的な発展が見られる「定式」についても同様です。

3

経済学研究の歩みと革命家としての立場

続いてマルクスは「私自身の経済学研究の歩み」にふれるとします(11～12頁)。それは、おおよそ次のように述べ

した諸関係を取り結び、すなわち、彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階にふさわしい生産諸関係を取り結び(14頁)。

「生産諸力」の内容は『資本論』の「人間と自然の物質代謝」論などにつながります。「生産諸関係」については、たとえば『資本論』第3部(1865年執筆)で「人間がその社会的生活過程において、その社会的生活の生産において、取り結ぶ諸関係」(新版・資本論)⑩、1571頁)とより端的に繰り返されます。

ヘーゲルが「物質的生活諸関係」の総体と呼んだ「市民社会」は多くの家族からなるもので、マルクスはこれを解剖するのが経済学だと書きました。後年エンゲルスは『家族・私有財産・国家の起源』(1885年)で「歴史を究極において規定する要因は、直接的生命の生産と再生産」であり、したがって「生活手段の生産」と「人間自体の生産」だと述べますが(古典選書、12頁)、『資本論』第1部が労働者の再生産を様々に論じているように、マルクスの「生産諸関係」もこの両方を含んだものになっています。ここはジエンダー視角からの資本主義分析やケア労働を論ずる上で根本にすえられるべき論点です。

「これらの生産諸関係の総体は、社会の経済的構造を形成する。これが実在の土台であり、その上に一つの法的かつ政治的な上部構造がそびえ立ち、その土台に一定の社会

られました。①哲学や歴史の研究からスタートしたマルクスが経済問題に取り組まずにおれなくなった経過(ライン新聞)での論戦、12～13頁)、②人間社会の中で「市民社会」がどついつ位置を占めるかをめぐるヘーゲル理論との格闘(法的関係や国家形態は「物質的な生活諸関係に根ざしている」、「生活諸関係」の解剖は経済学で、13頁)、③その研究のさらなる発展によって得られた「一般的結論」の展開(社会革命論を中心とした、史的唯物論の定式、14～16頁)、④「一般的結論」以後の経済学にとどまらない諸研究の紹介(「共産党宣言」、「哲学の貧困」、「ニューヨーク・デイルー・トリビューン」への寄稿他、16～18頁)。

こつして革命家としての政治的立場をも鮮明にしたマルクスは、だからこそ「序言」を次の「要求」で締めくくります。たとえ「私の見解」が「支配階級の利己的な偏見とどれほど一致しないとしても」「それは長年にわたる良心的な研究の成果」であり、読者は「一切の恐怖」「一切の卑怯」を捨て、科学の門をくぐるにふさわしい態度をもってこれに立ち向かわなければならぬ(18～19頁)。

4

社会の構造、土台と上部構造の相互作用

「定式」の内容に進みます。「人間は、彼らの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立

的意識形態が対応する。物質的生活の生産様式が、社会的、政治的、および精神的な生活過程全般を制約する。人間の意識がその存在を規定するのではなく、逆に、人間の社会的存在がその意識を規定する」(14頁)。

土台と上部構造というのは人間社会を建物のしくみに模した比喩的表現で、「土台」は建物の土台、「上部構造」はその土台の上に立つ部分を示しています。一定の生産諸関係の下での「物質的生活の生産」が、それ以外の「生活過程」を「制約」すると慎重に表した点は重要です。『資本論』第3部で「同一の経済的土台」をもつ社会も、その他の「異なる経験的事情」により「現象においては、無限の変化およびニュアンスを示しうる」と書いたように(前出⑪、1413頁)、マルクスは上部構造や社会的意識の領域をも社会の具体的な姿を決める独自の要因ととらえています。さらに晩年のエンゲルスは、マルクスと私には若い時代に経済的土台の規定的役割のみを強調しすぎた「責任がある」とし(マルクス、エンゲルス書簡選集「下」、139頁)、両者の関係を「二つの不等な力の相互作用」(同、144頁)と表現していきます。

5

社会革命、新しい社会への交代の条件

「社会の物質的生産諸力は、その発展のある段階で、そ

れまでそれらがその内部で運動してきた既存の生産諸関係と、あるいはその法律的表現にすぎない所有諸関係と、矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展の諸形態からその桎梏^{しごく}に一変する。そのときに社会革命の時期が始まる。経済的基礎が変化するにつれて、巨大な上部構造の全体が、徐々にせよ急激にせよ、くつがえる」(14頁)。

社会革命の「時期」を判断する基準は、生産諸力の発展にとつて古い生産諸関係が「桎梏」になるということで、革命の根本は「経済的基礎」の変革だとされています。

「このような諸変革を考察するにあたっては、経済的な生産諸条件に起きた自然科学的な正確さで確認できる物質的な変革と、人間がこの衝突を意識するようになりこの衝突をたたかい抜いて決着をつける場となる、法律、政治、宗教、芸術、または哲学の諸形態、簡単に言えばイデオロギー諸形態とを、つねに区別しなければならぬ」(このような変革の時期を、その時期の意識をもとに判断することはできないのであって、むしろこの意識は、物質的生活の諸矛盾から、すなわち社会的生産諸力と生産諸関係とのあいだに存在する衝突から、説明されなければならない」(14～15頁)。

その時代をたたかう人間の意識から革命の客観的内容を

「こうして『定式』が社会革命論を重視したことの背後には、1857年の恐慌に続く社会の平穩により、それまでのマルクスの「恐慌＝革命」論が裏切られたという事情がありました。革命をあらためて理論の根本から考え直さねばならないという切実な問題意識があったのです。

「階級」や「階級闘争」という用語が、『定式』に登場しないのは、『ドイツ・イデオロギー』のこれに対応する文章や『資本論』第3部での史的唯物論の展開についても同様です。他方で『資本論』第1部での社会の力による資本の規制という議論は、「桎梏」を資本主義の枠内での改革とそれを超える革命との関係のなかでより具体的に論ずる入口となるものです。

6

「人間的社会」に先行する歴史が終わる

「大づかみに言って、アジア的、古代的、封建的、および近代ブルジョア的生産様式が、経済的社会構成体の進歩していく諸時期として特徴づけられよう。ブルジョア的生産諸関係は、社会的生産過程の最後の敵対的形態である。敵対的というのは、個人的敵対という意味ではなく、個人の社会的生活諸条件から生じてくる敵対という意味である。しかしブルジョア社会の胎内で発展しつつある生産諸力は、同時にこの敵対を解決するための物質的諸条件をも

判断することはできないというのは、自由、平等、博愛をかかげたブルジョア革命が、新しい不自由や不平等をともなう資本主義を導いたなどのリアルな歴史認識にもとづいています。

ただし発達した資本主義から次の社会への革命には少し違った事情も生まれてきます。たたかひの意識が資本主義の生産諸力と生産諸関係の衝突から説明される点は同じですが、ここでは経済的基礎の変革過程も多数者の合意にもとづくものとなり、その結果、他の時代の革命に比べ、経済的物質的な変革とたたかう者の意識の一致がより広いものとなるからです。

「一つの社会構成体は、すべての生産諸力がそのなかでもう発展の余地がないほどに発展しきらないうちは、けつして没落することはなく、また、新しいさらに高度の生産諸関係は、その物質的な存在諸条件が古い社会の胎内で孵化^{ふか}しきらないうちは、けつして古いものに取って代わることはなく」(15頁)。

「社会構成体」「経済的社会構成体」というのは、人間社会を土台と上部構造の相互作用の下にとらえた用語です。資本主義の「胎内で孵化」する「物質的な存在諸条件」として『資本論』第1部は労働者階級の発達についての研究を新たに深めていきます。

つくりだす。それゆえ、この社会構成体をもって人間的社会 (menschlichen Gesellschaft) の前史は、終わりを告げる」(15～16頁)。

当時マルクスがとらえた歴史の具体像については多くの議論がありますが、肝心なことはそれらの時期を分かっ根本が生産のあり方だという視点です。

最後の「人間的社会」は「人類社会」と訳されることが多いですが、マルクスは『ドイツ・イデオロギー』の直前に書いた「フォイエルバッハに関するテーゼ」(1845年)で、「古い唯物論の立場はブルジョア社会であり、新しい唯物論の立場は、人間的社會 (menschlichen Gesellschaft)、あるいは社会的人類である」(『ドイツ・イデオロギー』古典選書、113頁)とし、その「人間的社会」に人々の協働にもとづく真に人間的な未来社会という意味をもたせました。これとの連続性を考慮すれば、『定式』のこの一文は、ブルジョア社会は社会的生産の敵対すなわち人間社会の階級への分裂を解決する条件をつくる、したがってブルジョア社会をもって協働的な未来の「人間的社会」に先行した階級社会の歴史は終わる」と読むべきでしょう。

〔第5回はエンゲルス「イギリスにおける労働者階級の状態」です〕